

# 共感性が向社会的行動に及ぼす影響

—社会的望ましさ尺度を用いて—

畠中あゆみ・石津憲一郎

# 共感性が向社会的行動に及ぼす影響

—社会的望ましさを尺度を用いて—

畠中あゆみ\*・石津憲一郎

## The Influence that Empathy Gives to Pro-Social Behavior : Using Social Desirability Scales

Ayumi HATAKENAKA Kenichiro ISHIZU

キーワード : 共感性, 向社会的行動, 社会的望ましさ

Keywords : empathy, pro-social behavior, social desirability scales

### I 問題と目的

一昨年の東日本大震災の影響を受け、最近では人とのつながりが話題となっている。そして、新たな対人関係を構築したり、これまでの関係を維持したり、より良いものに発展させるための手段として向社会的行動が挙げられる。

向社会的行動とは、「外的報酬を期待することなしに、他人や他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとする行動である」と定義されており (Mussen, & Eisenberg-Berg, 1977), その内容には分与・寄付行動, ボランティア活動, 協力行動, 思いやり行動などが含まれる。

向社会的行動の生起過程には様々な要因が関係している。外的要因としては渡辺・衛藤 (1990) が児童を対象として統制可能性の影響を調査している。統制可能性とは、援助を求めている他者自身の努力次第でその困窮状態を回避することができるかどうかということであるが、その中で共感性が高いと他者の統制可能性について深く判断できるため、被援助者自身によって統制可能な場合は向社会的行動をとりにくいという結果を示している。さらに、松田・土師 (1998) は共感性と統制可能性に加えて自己の状況の影響について検討し、年齢が低く、共感性が低い場合に自己の状況に影響されやすいこと、自分が快適な状況にいる場合は統制可能性の影響を受け、そうでない場合は共感性の影響を受けるという結果を示した。また、浜崎 (1985) が他者存在の効果について研究しているが、これらの研究は共感性の発達が未熟な幼児や児童を対象としていることから共感性を測りきれない可能性もある。また、内的要因としては共感性や罪悪感が扱われており、本研究でも共感性に焦点を当てることとする。

共感性は「他者の経験についてある個人が抱く反応を扱う一組の構成概念」と定義されており (Davis, 1994), 近年では共感性を認知的側面と感情的側面の両方から測定する尺度が開発されている。その尺度のひとつに葉山・植村・萩原・大内・及川・鈴木・倉住・桜井 (2008) の作成した共感性プロセス尺度がある。これまでの研究からは認知的共感性が感情的共感性に影響を与えることを通じて向社会的行動が生じることが示されており、この尺度を使った植村・萩原・及川・大内・葉山・鈴木・倉住・桜井 (2008) の研究では、他者感情への敏感性から視点取得, ポジティブおよびネガティブな感情の共有を経て、それぞれの感情に対応した他者志向的反応へと至り、向社会的行動につながるというプロセスが明らかになった。

共感性と向社会的行動との関連を扱った先行研究からは、共感性が高い人は低い人よりも援助行動が多いことが明らかになっている (Mehrabian&Epstein, 1972)。また、桜井・葉山・鈴木・倉住・萩原・鈴木・大内・及川 (2011) は共感性と向社会的行動, 攻撃行動との関連を調べ、他者のポジティブ・ネガティブ両方の感情に共感できる群は、最も向社会的行動をとりにくい群は攻撃行動をとりにくいことを明らかにした。しかし、桜井 (1988) は大学生を対象に、共感性と心理実験への参加協力というかたちで援助行動を測定し検討した結果、両者に有意な関係がみられず、援助行動に対する責任の分散が起こった可能性が示唆されている。

先行研究の結果を踏まえると実際の向社会的行動場面を扱った場合に、共感性との関連が見られないことがわかる。そこで本研究では実際に向社会的行動をとる際には社会的に望ましいか否かの判断が混ざっている可能性を考えた。そして、質問紙を用いて測定する「自分がと

\*2013年3月卒業

と思う向社会的行動の頻度」と、実験参加への承諾から測定する「実際に向社会的行動をとる場面」との2側面を向社会的行動ととらえることとする。そして、共感性ではなく社会的望ましさの影響が強くなると自分がとると思う向社会的行動の頻度と実際の行動場面においてどのような違いが出るのか、共感性は自分がとると思う向社会的行動と実際の行動の両方を動機づけるのかを検討することを目的とする。

## II 方法

### 調査協力者

X大学の学生217名(男子113名, 女子94名, 不明10名)。そのうち、記入漏れや回答ミスなどを除いた152名(男子72名, 女子76名, 不明4名)を分析対象とした。平均年齢は18.82歳。

### 実施時期

2012年10月下旬～11月下旬。授業時間の10～15分間を利用し、2回のアンケート調査を行った。1回目と2回目の調査の間を2週間空け、質問紙は調査協力者の同意を得たうえで調査者が一斉に配布・実施し、回収した。

### 調査内容

アンケート(1):フェイスシートには年齢、性別、2回目に行動指標をとる際に使用する質問紙と回答者を一致させるためのIDを記入してもらった。

向社会的行動尺度は全20項目からなる菊池(1988)の作成したものを用い、表現が古かったことと調査協力者の大半が未成年であることを考慮し、「手紙を送る」を「メールする」に変える、「酒に酔った友人の世話をする」「自動販売機や切符売機の使い方を教えてあげる」という項目を削除するなどの修正を加え、全18項目とした。回答方法は、各項目につき「絶対にしない」「たまにする」「少しする」「たいていする」「必ずする」の5件法で、それぞれの得点を1～5点とした。

共感性プロセス尺度は全30項目からなる葉山ら(2008)の作成したものを用いた。この尺度は「視点取得」「他者感情への敏感性」「ポジティブな感情の共有」「ネ

ガティブな感情の共有」「ポジティブな感情への好感」「ネガティブな感情への同情」の6つの下位尺度から構成されている。回答方法は各項目につき、「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらとも言えない」「少しあてはまる」「あてはまる」の5件法で、それぞれの得点を1～5点とした。

社会的望ましさ尺度は全19項目からなる佐藤・安田・吉村(1997)の作成したものを用いた。回答方法は各項目につき「はい」「いいえ」の2件法で、それぞれの得点を1～2点とした。

アンケート(2):フェイスシート、1回目の質問紙との関連を想定させることを防ぐため、「最近印象に残ったニュースについて、下の空欄に書いてください」とダミーの自由記述項目、心理実験への参加の同意をたずねた。これにより実際に向社会的行動をとるか否かを測定した。

心理実験への参加の同意をたずねる際、実験の日時は参加同意者の希望に合わせることを、個人の特長はしないこと、個人情報に厳重に管理することを強調した。回答方法は、同意する場合はメールアドレスを書いてもらい、同意しない場合は何も記入しないこととした。なお、心理実験への参加を同意してくれた被験者は、デブリーフィングの後、本研究とは異なる心理実験に参加した。

## III 結果

### 相関分析

まず、各変数の平均値、標準偏差を算出し、共感性プロセス尺度得点と社会的望ましさ尺度得点、向社会的行動尺度得点における相関分析、共感性プロセス尺度の因子得点と社会的望ましさ尺度得点、向社会的行動尺度得点における相関分析を行った(Table1)。その結果、共感性と社会的望ましさには相関は見られなかった。また、共感性と向社会的行動には正の相関が見られ、共感性と社会的望ましさ、社会的望ましさと向社会的行動には相関は見られなかった。

また、「視点取得」「敏感性」「ポジティブな感情の共有」「ネガティブな感情の共有」「ポジティブな感情への好感」

Table1 共感性プロセス尺度・社会的望ましさ尺度・向社会的行動尺度の平均(SD)と尺度間相関の検討

	記述統計量		尺度間相関		
	平均	SD	共感性	望ましさ	行動
共感性	108.72	17.61	-		
望ましさ	29.41	2.73	.00	-	
行動	60.61	10.98	.50**	-.11	-

\*\* $p < .01$

注)「共感性プロセス尺度」「社会的望ましさ尺度」「向社会的行動尺度」はそれぞれ「共感性」「望ましさ」「行動」と略記した。

Table2 共感性プロセス尺度の下位尺度と各変数の平均 (SD) および尺度間相関の検討

	記述統計量		尺度間相関						
	平均	SD	1	2	3	4	5	6	7
1 視点取得	18.17	3.57	-						
2 敏感性	19.28	3.90	.74**	-					
3 ポジ共有	17.56	3.87	.50**	.33**	-				
4 ネガ共有	15.89	4.13	.55**	.41**	.46**	-			
5 ポジ好感	19.34	3.66	.65**	.53**	.78**	.54**	-		
6 ネガ同情	18.46	3.32	.52**	.46**	.44**	.57**	.53**	-	
7 望ましさ	29.41	2.73	.01	-.02	-.02	.09	-.04	.00	-
8 行動	60.61	10.98	.39**	.37**	.35**	.36**	.51**	.41**	-.11

\*\* $p < .01$ 

注) 「他者感情への敏感性」「ポジティブな感情の共有」「ネガティブな感情の共有」「ポジティブな感情への好感」「ネガティブな感情への同情」はそれぞれ「敏感性」「ポジ共有」「ネガ共有」「ポジ好感」「ネガ同情」と略記した。

「ネガティブな感情への同情」と向社会的行動に正の相関が見られた (Table2)。

#### 分散分析

1. 共感性の高さおよび社会的望ましさの高さが向社会的行動に及ぼす影響を検討するため、共感性、社会的望ましさを独立変数、向社会的行動尺度を従属変数とする対応のない被験者間 2 要因の分散分析を行った。その際、共感性と社会的望ましさは、それぞれの得点の平均値をもって高群と低群に分類した。分散分析の結果、社会的望ましさの主効果および共感性と社会的望ましさの交互作用は見られず、共感性の主効果がみられた ( $F=21.58, p < .01$ ) (Table3)。

2. 共感性を多角的に検討するために、共感性プロセス尺度を認知的側面の 2 因子、感情的側面の 4 因子の 6 つに分類した。そして各因子と社会的望ましさに向社会的行動に及ぼす影響を検討した。ここでも同様に、共感性の各因子の平均値を基に、高群と低群を設定した。分散分析の結果、すべての因子において社会的望ましさとの交互作用は見られず、「他者感情への敏感性」「視点取得」「ポジティブな感情の共有」「ネガティブな感情の共有」「ポジティブな感情への好感」「ネガティブな感情への同情」の因子について主効果が見られた (それぞれ

( $F=12.06, p < .01$ ) ( $F=8.42, p < .01$ ), ( $F=6.90, p < .01$ ), ( $F=8.70, p < .01$ ) ( $F=27.36, p < .01$ ), ( $F=14.82, p < .01$ ) (Table4))。

#### t 検定

共感性の高さおよび社会的望ましさの高さが実際に向社会的行動をとる際にどれほど影響を及ぼすかを検討するため、心理実験への参加の同意があるものを 1、ないものを 2 と質的データとし、t 検定を行った。その結果、参加の同意のあり、なしともに共感性の影響も社会的望ましさの影響も見られなかった。

## IV 考察

相関分析の結果、共感性と社会的望ましさ、社会的望ましさと向社会的行動との間に相関は見られず、共感性は向社会的行動と正の相関であることから共感性が高いほど向社会的行動すると回答することがわかった。

分散分析の結果からは共感性と社会的望ましさの交互作用は見られず、共感性の主効果のみが見られたことから向社会的行動に対する動機づけは共感性によって行われることがわかった。

共感性の下位尺度と社会的望ましさとの分散分析の結果

Table3 共感性プロセス尺度および社会的望ましさ尺度と向社会的行動尺度の分散分析結果

	望ましさ低群		望ましさ高群			
	共感性低群	共感性高群	共感性低群	共感性高群		
	n=40	n=37	n=35	n=40		
向社会的	57.85	65.81	55.45	63.07	望ましさ F	2.33
行動	(9.64)	(9.74)	(11.44)	(10.44)	共感性 F	21.58**
(尺度)					交互作用 F	0.01

\*\* $p < .01$ 

注) () 内は標準偏差

Table4 共感性プロセス尺度の各下位尺度ごとの社会的望ましさを尺度と向社会的行動尺度の得点と分散分析結果

	望ましさを低群		望ましさを高群		
	感性低群	感性高群	感性低群	感性高群	
	n=36	n=41	n=36	n=39	
向社会的 行動 (尺度)	59.69 (9.42)	63.41 (11.05)	56.19 (11.59)	62.58 (10.66)	望ましさをF 1.54 感性F 8.42** 交互作用F .58

  

	望ましさを低群		望ましさを高群		
	視点取得低群	視点取得高群	視点取得低群	視点取得高群	
	n=39	n=38	n=42	n=33	
向社会的 行動 (尺度)	58.07 (10.26)	65.36 (9.35)	57.45 (11.48)	62.15 (11.15)	望ましさをF 1.23 役割取得F 12.06** 交互作用F .56

  

	望ましさを低群		望ましさを高群		
	ポジ共有低群	ポジ共有高群	ポジ共有低群	ポジ共有高群	
	n=38	n=39	n=35	n=40	
向社会的 行動 (尺度)	57.97 (11.15)	65.28 (8.31)	58.54 (10.61)	60.37 (12.30)	望ましさをF 1.55 ポジ共有F 6.90** 交互作用F 2.47

  

	望ましさを低群		望ましさを高群		
	ネガ共有低群	ネガ共有高群	ネガ共有低群	ネガ共有高群	
	n=37	n=40	n=28	n=47	
向社会的 行動 (尺度)	59.18 (10.11)	63.97 (10.30)	55.96 (11.63)	61.63 (11.00)	望ましさをF 2.46 ネガ共有F 8.70** 交互作用F .06

  

	望ましさを低群		望ましさを高群		
	ポジ好感低群	ポジ好感高群	ポジ好感低群	ポジ好感高群	
	n=35	n=42	n=36	n=39	
向社会的 行動 (尺度)	57.05 (10.63)	65.52 (8.62)	54.94 (11.57)	63.74 (9.80)	望ましさをF 1.39 ポジ好感F 27.36** 交互作用F .01

  

	望ましさを低群		望ましさを高群		
	ネガ同情低群	ネガ同情高群	ネガ同情低群	ネガ同情高群	
	n=39	n=38	n=33	n=42	
向社会的 行動 (尺度)	59.15 (9.75)	64.26 (10.58)	55.00 (11.54)	63.07 (10.26)	望ましさをF 2.43 ネガ同情F 14.82** 交互作用F .74

\*\* $p < .01$

注) ()内は標準偏差

果からはポジティブな感情への好感尺度が $F=27.36$ と高く、下位尺度の中で最も向社会的行動に影響を及ぼしていることが示唆された。これは葉山ら(2008)が明らかにした他者志向的反応から向社会的行動が導かれるということ、ネガティブな感情への同情よりポジティブな感情への好感のほうがより強く向社会的行動に影響を及ぼしているという結果を支持しているものと判断できる。

また $t$ 検定の結果、実際に向社会的行動をとった群ととらなかった群の共感性の高さ、社会的望ましさを比較したが、どちらの影響も見られず、実際に向社会

的行動をとる際は共感性によって動機づけられているのではないことが示唆された。

多くの先行研究では向社会的行動の頻度と共感性との関連を、尺度を用いて測定し有意な結果を出してきたが、実際の向社会的行動場面を扱った研究では有意な結果は見られていない。これらの先行研究の結果と今回の結果を踏まえて考察すると、これまでの研究で測定されてきた共感性は向社会的行動を動機づけるものだが、実際に行動を起こす段階での共感性は測りきれなかった可能性が示唆される。あるいは、尺度による向社会的行動と共

感性の高さに関連があることは示されたが、実際に向社会的行動をとる場面では共感性の高さが他の要因につながり、その要因の影響のほうが強くなる可能性も考えられる。そこで共感性が向社会的行動に直接の影響を及ぼさなかった原因を考えてみる。

まず統制可能性との関連を考えると、共感性の認知的側面が発達している場合、他者の困窮状態に対してなぜその状況に至ったのか、その人の努力次第で対処できる問題なのかどうかという思考が生まれ、緊急性や統制不可能な状況が認知された場合に向社会的行動につながる。反対に、共感性が高くても認知的側面の発達が未熟であれば他者に対する感情面の判断のみで行動につながるため向社会的行動をとりやすくなることが考えられる。これを今回の向社会的行動場面に当てはめると、共感性が高い人は紙面による協力依頼だったため緊急性が感じられず、卒業論文で使うデータの収集だったため本人の努力で乗り越えることのできない問題ではないという判断に至り、向社会的行動につながらなかったと考えられる。反対に、協力してくれた人は感情的な判断で行動を起こしたと考えられるので、情動的側面に焦点を当てて調査を行うとまた違った結果が現れるかもしれない。

次に共感のパターンの違いである。他者のどのような感情に共感しやすいかは人によって異なってくる。個人の共感のパターンを考えるとポジティブな感情に対する共感が低い人は全体的に共感性が低い人よりも向社会的行動をとりにくいという指摘がある(桜井ら, 2011)。ポジティブな感情に共感できないと妬みや羨望を抱くことになるので向社会的行動は抑制されてしまう。このことから考えるとポジティブな感情への好感が向社会的行動に強く影響を及ぼしていたことも逆説的に証明される。それでも実際の行動に影響がなかったのは、今回の心理実験の協力依頼という場面では援助を求めている他者の感情を判断できなかった可能性も推察される。そのため、実験依頼者に対する共感感情が湧きづらかったため、直哲的な援助行動につながらなかったと考えられる。これはポジティブ・ネガティブのどちらの感情からも有意な影響が見られなかった今回の結果から示唆される。

最後に、向社会的行動の生起モデルについて尾関・朴・中島・吉澤・原田・吉田(2008)が集合的有能感の高さが所属コミュニティに対する愛着を強め、向社会的行動につながるというモデルを確認している。自分が所属するコミュニティへの愛着が向社会的行動の促進因になることから考えると、学部、学科または学年などのコミュニティの影響が出ることが考えられる。自分と同じ所属であることがわかると、そのことによる愛着がわき、それが向社会的行動につながった可能性が考えられる。集合的有能感についても考慮すると結びつきが弱かったために愛着は湧いていたが実際に行動するまでには至らず、同意数が少なかった原因になると考えられる。

しかし尾関らの向社会的行動の生起モデルだと親しい人に対する向社会的行動しか見られない可能性や取り上げるコミュニティによっては違いが見られない可能性がある。見ず知らずの他者にも同じような理由で行動が生起するのか、そのモデルの中に共感性の影響も見られるのかなど検討していく価値はあるだろう。

以上のことから本研究では他者のポジティブな感情に対する共感が質問紙による向社会的行動に強く影響していること、共感性は向社会的行動をとる場面を想定させ、その行動に対する動機づけは行っても、実際に向社会的行動をとる段階での動機づけにはならない可能性が示された。そして、共感性はあくまで向社会的行動に対する意欲を高めるもので、実際に行動につなげるためには統制可能性、緊急性など状況的な要因が動機づけより高めると推察できる。

最後に本研究の課題であるが、まず、アンケートの有効回答数に対して実験協力に同意してくれた調査協力者が少なかったことが挙げられる。実験依頼に承諾してくれる割合を増やすため、統制不可能な状態や緊急性を感じさせる条件を設定したり、援助を求めている他者の感情を判断できる条件にするなどして再検討する必要があるだろう。また、向社会的行動と愛着、愛着と共感性との関連についてあまり研究は進められていないため、共感性と社会的望ましさだけでなく、学部や学年による愛着の差が出るのかも含めて検討する必要があると考える。

#### IV 引用文献

- Davis, M. H. 1994 *Empathy. A social- psychological approach*. Westview Press. (菊池章夫(訳)(1999) 共感の社会心理学 川島書店)
- 浜崎隆司 1985 幼児の向社会的行動におよぼす共感性と他者存在の効果 心理学研究, 56, 103-106.
- 葉山大地・植村みゆき・萩原俊彦・大内晶子・及川千都子・鈴木高志・倉住友恵・桜井茂男 2008 共感性プロセス尺度作成の試み 筑波大学心理学研究, 14, 136-148.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 松田君彦・土師由美子 1998 共感性と援助行動に関する一研究 鹿児島大学教育学部研究紀要(人文・社会科学編), 49, 159-169.
- Mehrabian, A. & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525-543.
- Mussen, P., & Eisenberg-Berg, N. 1977 *Roots of caring, sharing, and helping: The development of prosocial behavior in children*. Freeman. (菊池章夫(訳) 1980 思いやりの発達心理 金子書房 6)
- 尾関美喜・朴賢晶・中島誠・吉澤寛之・原田知佳・吉田

- 俊和 2008 社会環境が子どもの向社会的行動に及ぼす影響 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 55, 47-55.
- 桜井茂男 1988 大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感性尺度を用いて— 奈良教育大学紀要, 37, 149-153.
- 桜井茂男・葉山大地・鈴木高志・倉住友恵・萩原俊彦・鈴木みゆき・大内晶子・及川千都子 2011 他者のポジティブ感情への共感的感情反応と向社会的行動, 攻撃行動との関係 心理学研究, 82, 123-131.
- 佐藤徳・安田朝子・吉村聡 1997 Marlowe-Crowne 尺度日本語版の作成と尺度の意味について 早稲田心理学年報, 30, 9-17.
- 植村みゆき・萩原俊彦・及川千都子・大内晶子・葉山大地・鈴木高志・倉住友恵・桜井茂男 2008 共感性と向社会的行動との関連の検討—共感性プロセス尺度を用いて— 筑波大学心理学研究, 36, 49-56.
- 渡辺弥生・衛藤真子 1990 児童の共感性及び他者の統制可能性が向社会的行動に及ぼす影響 教育心理学研究, 38, 46-51.

(2013年8月9日受付)

(2013年10月9日受理)